

公開シンポジウム「催眠と無意識の心理学」に参加して

長谷川明弘(金沢工業大学)

今回、平成 17 年 8 月 5 日(金)の午後に日本学術会議心理学研究連絡委員会主催で催された公開シンポジウム「催眠と無意識の心理学」の印象記を報告します。

当日は、薄曇りの金沢から晴天の東京に到着し晴れ晴れとした気持ちで日本学術会議に向かいました。参加者が少ないのではないかという事前情報ではありましたが、会場に到着してみると人があふれ、急遽通路にまで座席が用意されるほどの盛況な会となりました。

シンポジスト並びに司会者、指定討論者とテーマは以下の通りでした(敬称略)。成瀬悟策(吉備国際大学教授・九州大学名誉教授)「催眠研究で得た私の心理学基礎論」、香山雪彦(福島県立医科大学教授)「脳生理学は無意識体験をどこまで説明するか」、齋藤稔正(立命館大学教授・前日本催眠医学心理学会理事長)「根元的意識としての催眠と生体リズム」、河野良和(河野心理教育研究所所長)「意識体験と意識化とその作用」、司会：鶴光代(秋田大学教授・日本催眠医学心理学会理事長)、指定討論：笠井仁(筑波大学心理学系助教授)となっていました。

成瀬先生は、催眠法からはじまった臨床動作法の開発のエピソードを交えて話され、動作の中に含まれる意識だけでなくこれまで無意識と呼んでいたものを細分化した原(モト)意識、現(イマ)意識、潜(きえ)意識という概念を示され、「動作を中心とした心理学が 21 世紀後半には主流になるのではないか」と展望を話されました。香山先生は、生理学の教科書に無意識だけでなく意識についても全く記載がなかったのが、新しく教科書の執筆依頼を受けたときに「意識」の項目を設けたそうです。講演では、これまでの脳生理学の知見を踏まえて、意識に上らないが脳内で起きている現象について説明されました。齋藤先生は、人間が成長するにつれて現実への適応を求められ、すべての人が元来持っている根源的意識を潜在化させてしまうと話されました。そこで催眠は、根源的意識が顕在化しやすい状態で、正常な現象であると考えを述べられました。河野先生は、ご自身の臨床体験とそのデータから考案された概念を提示されました。催眠者からの暗示を被催眠者の意識

体験が自己暗示として取り入れる。一方で被催眠者の意識は全体として明確化できない。しかし自己暗示として取り入れるプロセスの中で意図しない(つまり無意識に)催眠反応が生じることに臨床的な有用性があると話されました。指定討論の笠井先生は、日本学術会議で催眠に関するシンポジウムが開かれることの重大さを指摘され、催眠の過去から現在について歴史を振り返った上での催眠研究の未来という観点での意見をシンポジストに求められました。鶴先生の手際よい司会があり、フロアーを交えた会場内での意見交換がなされました。今回のシンポジウムに参加してみて若年層(?)の参加が目立ち、催眠研究が盛んになる可能性を予感させました。

書誌情報

NEWSLETTER

2006.4.25 日発行

日本催眠医学心理学会 No.51

5-6 「催眠と無意識の心理学」印象記：公開シンポジウムに参加して